

## 「旧約の信仰者たちの手本」 ダビデ ③ (11:32~34)

## ■はじめに

## 1. 手紙の背景と執筆目的

- (1) ヘブル人への手紙を書いた著者、そしてこの手紙を受け取った読者も、直接イエスを見聞きしたことはない第2世代のユダヤ人信者である。
- (2) この手紙が書かれた時期は、紀元64年から66年頃と推定される。ユダヤ人の間でローマ帝国に対する反乱の機運が高まる中、愛国主義的な同胞たちから教会に対する迫害が激しさを増していた。
- (3) 一部のユダヤ人信者の中には、迫害を鎮静化するため、いったんエルサレムの神殿祭儀に戻ろうという動きが出始めた。この背教の動きに対して、著者は警告のためにこの手紙を書いた。
- (4) 警告は、肉体の滅びを招くということであって、霊的な救いを失うことではない。

## 2. 手紙の内容と11章

- (1) ユダヤ教の三本柱は、「天使」、「モーセ」、「レビ族アロンの家系の祭司による祭儀」である。著者は、手紙の前半で、神の御子であるメシアは、天使にも、モーセにも、そしてアロンにも優ることを教える。
- (2) 手紙の後半は、前半の教えに基づき、信者はどのように歩むべきかを説明する。その中で、11章は、旧約聖書に記録された信仰の先輩たちの手本にならおうという部分である。時代を追って、
  - ① 族長時代以前：アベル、エノク、ノア
  - ② 族長たちの時代：アブラハム、イサク、ヤコブ、ヨセフ
  - ③ 出エジプトから荒野の旅：モーセの両親、モーセ、イスラエルの人々、ラハブ
  - ④ 士師記の時代前期から二人の士師、ギデオンとバラク（時期的にはバラクが先）
  - ⑤ 士師記の時代後期から二人の士師、サムソンとエフタ（時期的にはエフタが先）
  - ⑥ 士師記の時代の後、王ダビデと最後の士師であり預言者であるサムエル
  - ⑦ 「預言者たち」は原文では、「またダビデとサムエルと預言者たち」とあり、サムエルの後に続いた預言者たちを指している。
- (3) 前回までに、「サムエルの晩年とダビデの登場」、「ダビデ① 20歳から30歳【王となる】まで」、「ダビデ② 30歳から50歳【ソロモンの誕生】まで」
- (4) 本日は、「ダビデ③ 50歳から70歳【ダビデの死】まで」

## ■サムエルの晩年とダビデの登場 (BC1028 - BC1020)

1. ダビデは、少年のときに預言者サムエルから油を注がれた。少年らしい一途な信仰でゴリアテを倒し、サウルに登用されるが、ダビデに自分の地位が脅かされると恐れたサウルに命を狙われることになった。
2. 10代後半のダビデを支えたのは、第一にヨナタン（サウルの子であるが、ダビデを愛し契約を結んだ友）、第二に預言者サムエル（師）、そして第三に神が集めてくださった勇士たち（最初は400人、間もなく600人）であった。
3. 逃亡中のダビデ20歳のときに、サムエルがこの世を去った。

## ■ダビデ① 20歳から30歳【王となる】まで (BC1020 - BC1010)

1. 20歳から30歳にかけて、ダビデの信仰を成長させたのは、苦難の中での忍耐である。
2. 逆境の中で忍耐が切れそうになるときがある。特にプライドを傷つけられたときである。自分を侮辱したナバルに対して復讐しようとしたダビデ、それを止めたアビガイル。彼女は、逆境の中にあるダビデを、信仰をもって支える妻となった。
3. 苦難の中で希望を失うこともある。しかし、主は見捨てない。
  - (1) 逃避生活10年、28歳頃となっていたダビデは、ついに国外に出て、ガテの王アキシシュを頼り、ペリシテ人の地に寄留してしまった。ダビデと部下600人は、略奪隊となってネゲブ地方の町々を襲うという生活に陥る。そして、寄留して1年4か月、ペリシテ人とイスラエルとの戦いが起きて、ダビデたちはペリシテ軍として従軍することになる。
  - (2) しかし、アキシシュ以外のペリシテ人の領主たちはダビデへの不信を表明した。ダビデたちは陣営から外され、寄留地へ帰らされる。帰りつくと、寄留地は無残な姿。アマレク人の略奪隊に襲われ、ダビデの二人の妻、そして部下たちの家族全員が奴隷として連れ去られた後であった。部下たちは、このような結果になったのは、ダビデの責任であるとしてダビデを石打ちの刑にしようとした。異邦人の仲間になってしまい、神のみこころから外れたからだ、と思ったのかしれない。
  - (3) ダビデは「主によって奮い立って」、600人の部下とともに必死でアマレク人の略奪隊を追いかけ、家族を取り戻すことができた。
  - (4) ペリシテ人とイスラエルとの戦いでは、イスラエルが敗れ、サウル王は死んだ。ダビデは、「主に伺って」、ユダの地に帰還し、ヘブロンに入った。ユダ族はダビデを王とした。このときダビデ30歳。

## ■ダビデ② 30歳から50歳【ソロモンの誕生】まで (BC1010 - BC990)

1. はじめはユダ族の王となったダビデ、37歳では全イスラエルの王となり、エルサレムを新しい王都とした。
2. イスラエルの新しい王を滅ぼそうとしたペリシテ人の2度にわたる攻撃を退ける。
3. 神の箱をエルサレムに運び上り、ダビデの幕屋による賛美礼拝を始める。
4. 神殿を建設しようとしたダビデに、主は預言者を通して、それを止められる。神殿建設はダビデ本人ではなく、ダビデの子がすべきこと、ダビデの家系からメシアが出て永遠の王国を治めることが告げられた(ダビデ契約)。
5. ダビデは、内政においては正しいさばきを行い、外交軍事においては周辺諸国を次々と平定していった。対アモンでは会戦に勝利し、首都ラバを包囲するところまで来た。
6. 年が改まり(春になって)、本来であればダビデも出陣するはずであったが、体力的に疲れがうかがえる。将軍ヨアブに全軍の指揮を任せ、ダビデはエルサレムに残った。このとき、ダビデは部下ウリヤの妻と姦淫をし、それを隠すために謀略に用いてウリヤを戦死させてしまった。ダビデ48歳頃と推定される。
7. 主は預言者ナタンを通して、ダビデに対し、罪の刈り取りを宣告する。

- (1) 宣告の内容
- ① 第一に、ダビデの家から剣が離れない
  - ② 第二に、ダビデに近い者が白昼公然とダビデの妻たちと寝る。
  - ③ 第三に、ダビデは死なないが、姦淫によって生まれた子は病死する
- (2) 神は、罪を必ず罰するお方である。
- ① これは旧約聖書に記された永遠の原則である。新約時代の私たち信者にも適用される。
  - ② 私たち新約の信者も、旧約時代の信者ダビデも、救いを受けるのは、信仰を通して恵みによって、である。そして一度受けた救い=永遠のいのちは、いかなることがあっても失われることはない。
  - ③ しかし、犯した罪の結果は、この地上で刈り取らねばならない。この場合、家長が罪を犯すと、そのさばきは家族の者に及ぶ。王が罪を犯すと、そのさばきは民に及ぶ。
- (3) ここでのダビデの罪の刈り取りは3つとも、家族の者に関係する。
- ① 第三の刈り取りはすぐ、現実となる。ただし、その子の靈魂の行先は、信者ダビデが死んでから行くところと同じ、すなわち、よみ<sup>へ</sup>シェオールの中の「慰めの場所」、別名「アブラハムのふところ」である。
  - ② 第一と第二の刈り取りは、ダビデの50歳から70歳の間、さらにその死後にまで続いて起きる。
8. ダビデは、主の前に罪を告白し、赦された（その詳細は、詩篇 51）
- (1) 赦されたという確信に立って、ダビデは妻バテ・シェバを慰めることができた。そして二人の間に、子が生まれた。
  - (2) ダビデは、その子にソロモンと名付けた。その名は、神殿を建てるべき後継者の名として主からあらかじめ示されていた名であった（I歴 22:9）。主は、これに応答してくださり、預言者を遣わして、「その子はエディディヤ（主に愛される者）と呼ばれる」と告げた。ダビデはこのとき、50歳頃と推定される。

#### 本日のアウトライン

1. 本日は、「ダビデ③ 50歳から70歳【ダビデの死】まで」です。
2. 関連箇所は、IIサム 13章からI列 2章まで、です。かなりのボリュームなので、まず全体像を、次のページの表、「ダビデの妻たちと19人の息子たち」により説明します。ここで見るのは、罪の刈り取りの宣告のとおりになっていくことです。あまりに厳しいという印象がありますが、次の2点を理解することが大切です。
  - (1) 「多く与えられた」ダビデが犯した罪ゆえの刈り取りであること（IIサム 12:7~9、ルカ 12:48）
  - (2) これらの出来事は、神によって仕向けられたことではなく（ヤコブ 1:13）、親から子へと引き継がれている罪の性質によるものであること（ヤコブ 1:14~15）
3. IIサム 13章からI列 2章のあらましを、レジメに沿って説明します。
4. IIサム 24章「アラウナの打ち場」が持つ意味を、I歴 21章を照らして学びます。

## ダビデの妻たちと19人の息子たち (IIサム3:2~5、5:13~16、I歴3:1~9)

結婚時期	妻の名	子の名	続柄	子の記事 【 】は妻について
~18歳	ミカル			【サウル王の二女、子なし】
20代 (荒野)	アビガイル	キルアブ (ダニエル)	次男	【ナバルの妻であったが、夫の死後、ダビデと再婚。苦難の時にあったダビデを支えた】 抗争に巻きまれている
	アヒノアム	アムノン	長男	父ダビデが50歳代前半の頃、タマルを犯して辱める。その2年後、アブシャロムにより殺される。
30~37歳 (ヘbron)	マアカ	アブシャロム	三男	アムノンを殺した後、3年間国外のゲシュルへ逃亡、2年間自宅軟禁。4年間、人心掌握につとめて、ついにクーデター。60歳代なかばのダビデから王位を奪うも、ダビデの家来との戦いに敗れて、殺される。
	ゲシュルの王 タルマイの娘	妹：タマル		
	ハギテ	アドニヤ  父ダビデを悩ませたことがない息子で、非常な美男子 (I列1:6)	四男	父ダビデが70歳に近くなった頃、将軍ヨアブと祭司エブヤタルの支持を受けて王になることを図るが、ダビデはソロモンを後継者とすることを宣言。ダビデの死後、「王位は私のものであるはず」と言ったうえに、ダビデのそば近くで仕えた女アビシャグを妻として求めたために、ソロモンによって殺された。
	アビタル	シェファテヤ	五男	
	エグラ	イテレアム	六男	
48歳頃 (エルサレム)	バテ・シェバ I歴3:5	シャムア ショバブ ナタン ソロモン		ナタン→マリヤ (ルカ3:31) ソロモン→エコヌヤ (エレ22:24~30) →ヨセフ (マタ1:6~16)
37歳~ (エルサレム)	?	イブハル		
	?	エリシュア		
	?	エリフェレテ		I歴3:6
	?	ノガハ		I歴3:7
	?	ネフェグ		
	?	ヤフィア		
	?	エリシヤマ		
	?	エルヤダ		
	?	エリフェレテ		

## ■ダビデ③ 50歳から70歳【ダビデの死】まで (BC990 - BC970)

1. 長男アムノンが、三男アブシャロムの妹タマルを犯し、辱める (Ⅱサム 13:1~22)
  - (1) ダビデは、事の一部始終を聞いて激怒するも、アムノンを罰しなかった (21節)
  - (2) アブシャロムはアムノンを憎むが、復讐の機をうかがうために黙る (20、22節)
2. 満2年後、三男アブシャロムが、羊の毛の刈り取りの祝いの席に、王子たちを招待し、長男アムノンを殺す (Ⅱサム 13:23~36)
3. 三男アブシャロムは、母の実家であるゲシュルの王のもとに逃げ込む (Ⅱサム 13:37~39)・・・3年間
4. 將軍ヨアブの仲介により三男アブシャロムをエルサレムに呼び戻すが、ダビデはアブシャロムを自宅に引きこもらせた (Ⅱサム 14:1~28)・・・2年間
5. アブシャロムは、將軍ヨアブの畑に火をつけるという強硬手段に訴えて、ダビデに面会する機会を得る。アブシャロムはダビデから赦しを受ける (Ⅱサム 14:29~33)
6. アブシャロムは私兵 50 人を雇って威容を整え、人心を「盗んだ」 (Ⅱサム 15:1~6)
7. 4年後、アブシャロムがクーデターを起こし、ダビデは側近とともにヨルダン川を渡り、マハナインにまで落ちのびる (Ⅱサム 15:7~17:24)
  - (1) 罪の刈り取り第二・・・Ⅱサム 16:21~23
8. ダビデの家来たちとイスラエル軍との戦い、三男アブシャロムの死、ダビデの帰還 (Ⅱサム 17:25~20:22)
9. ダビデが王であった期間にあった出来事 (Ⅱサム 21章)
  - (1) 3年間の飢饉、その原因と対応 (1~14節)
  - (2) ペリシテ人との戦いでダビデが疲れたこと (15~17節)
  - (3) その後のペリシテ人との戦い (18~22節)
10. ダビデの歌 (Ⅱサム 22章)
11. ダビデの最後のことばとダビデの勇士たちの名簿 (Ⅱサム 23章)
12. ダビデの人口調査事件とアラウナの打ち場 (Ⅱサム 24章、Ⅰ歴 21章と 22:1)
  - (1) サタンがイスラエルに逆らって立ち、ダビデを誘い込んで、イスラエルの人口を数えさせた (Ⅰ歴 21:1)
  - (2) この命令で、王は神のみこころをそこなった (Ⅰ歴 21:7)
  - (3) 主はイスラエルに疫病を下されたので、イスラエルのうち 7 万人が倒れた (Ⅰ歴 21:8~14)
  - (4) 主の使いは、預言者ガドを通して言った。「ダビデは上って行って、エブス人オルナンの打ち場に、主のために祭壇を築かなければならない。」 (Ⅰ歴 21:18)
  - (5) 打ち場と牛を銀 50 シェケルで買った (Ⅱサム 24:24)
  - (6) そこに主のために祭壇を築き、全焼のいけにえと和解のいけにえとをささげて、主に呼ばわった。すると、主は全焼のいけにえの上に天から火を下して、彼に答えられた (Ⅰ歴 21:26)
  - (7) そこで、ダビデは言った。「これこそ、神である主の宮だ。これこそ、イスラエルの全焼のいけにえの祭壇だ」 (Ⅰ歴 22:1)
  - (8) その地所代として、金のシェケルで重さ 600 シェケルにあたるものを、オルナン

11年

に与えた (I 歴 21:25)

13. ソロモンを呼び、神殿建設を命じる (I 歴 22:2~19)
14. 四男アドニヤが自ら王となろうとするも、ダビデはソロモンを王とする (I 列 1 章)
15. イスラエルのすべてのつかさ、祭司、レビ人を召集する (I 歴 23 章~29 章)
  - (1) 召集した人々について (I 歴 23:3~27 章)
  - (2) ダビデの命令 (I 歴 28 章~29:25)
16. ダビデのソロモンへの指示 (I 列 2:1~9)
17. ダビデの死 (I 列 2:10~12、I 歴 29:26~30)
18. 四男アドニヤの死 (I 列 2:13~25)

■ 「アラウナの打ち場」が持つ意味

1. II 歴 3:1 「こうして、ソロモンは、主がその父ダビデにご自身を現された所、すなわちエルサレムのモリヤ山上で主の家の建設に取りかかった。彼はそのため、エブス人オルナンの打ち場にある、ダビデの指定した所に、場所を定めた」
  - (1) ソロモンが神殿を建てた場所は、II 歴代誌では「オルナンの打ち場」とある。II サム 24 章の「アラウナの打ち場」と同じ場所である。神殿は、ダビデがサタンに誘惑されて犯した罪「人口調査」を贖うために祭壇を築いた場所に建てられた。
  - (2) その場所は、「モリヤ山上」とも、ある。神殿着工から 1063 乃至 1070 年前に、アブラハムがイサクを捧げた山である (創 22:2)。これは、主がアブラハムに与えた「試練」(創 22:1)、テストであった。何のためのテストかという、アブラハムが内側に持っていた復活信仰を明らかにするためであった (ヘブル 11:17~19)
  - (3) よって、神殿は、サタンに誘惑されて犯した罪を贖うための祭壇を築いた場所であるとともに、復活信仰が明らかに表明された場所に建てられたということである。
  - (4) 神殿の高さは 30 キュビト (I 列 6:2) であるが、山頂部の上に位置した内堂=至聖所は 20 キュビトの立方体 (I 列 6:16、20) である。
    - ① 神殿は、アラウナの打ち場すなわちモリヤ山の山頂部を削ることなく、その部分はそのままにして、その上に至聖所が設けられた、と推測される。
    - ② 現在、エルサレム神殿跡の中央には黄金色に輝くモスクが建っている。イスラムではこれを「岩のドーム」と呼び、モスクの中の岩を、「アブラハムがイシユマエルを奉献したモリヤ山上である」と主張している。しかし、モスクの北側には、山の山頂部が少し頭をのぞかせている所がある。ここが、本当のアラウナの打ち場であったと推定される。
2. I 列 6:1 「イスラエル人がエジプトの地を出てから 480 年目、ソロモンがイスラエルの王となってから 4 年目のジブの月、すなわち第二の月に、ソロモンは主の家の建設に取りかかった」→神殿は、出エジプトと関係がある。
  - (1) 申命記では、「主がご自分の住まいとして御名を置くために、あなたがたの全部族のうちから選ぶ場所」として預言されていた (申 12:5、11、14、18、21、26、16:2、6、11、15、16、17:8、10、18:6、26:2)
  - (2) イスラエルの使命は、出 19:5~6。その成就是、イザヤ 2:2~4、56:6~7、エゼ 37:24~28、ゼカ 8:3、20~23。